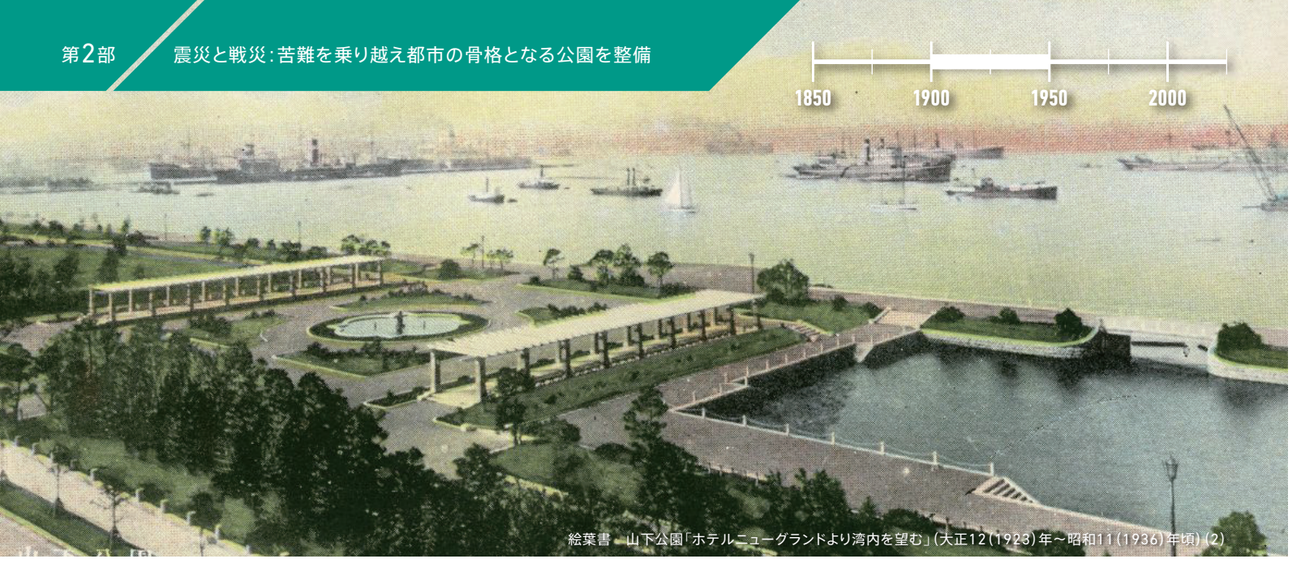

絵葉書　山下公園「ホテルニューグランドより湾内を望む」（大正12（1923）年～昭和11（1936）年頃）（2）

関東大震災からの復興 / 計画的なまちづくり

横浜港の貿易量増加や湾岸の工業化が進むと、都市化による問題が表出し、計画的なまちづくりが求められるようになりました。明治21（1888）年に東京市区改正条例が公布され、日本でも近代的な都市計画が定められるようになりました。横浜は、明治36（1903）年に基本方針である「横浜市今後の施設について」を発表しました。それまでの「受動的な発達」から「自動的即働きかけの発達」への転換をうたったもので、この時代の都市施策として画期的な、衛生施設の改善や慈善事業の奨励、公園整備など生活基盤整備にも触れていました。また、大正7（1918）年には横浜でも市区改正条例が準用されますが、どちらも財政難により整備は進みませんでした。

大正12（1923）年9月1日、関東大震災が横浜を襲いました。地震により多くの建物が倒壊したほか、その後発生した火災により市街地の90％近くが焼失し、33,543人が被災しました。

神奈川県下の多くの都市が自力での復興を余儀なくされたのと異なり、市は「帝都復興計画」に組み込まれ政府直轄の事業と市が行う事業とを合わせて復興に取り組むことになりました。復興計画では、港湾設備の拡張や幹線道路の整備、計画的な街路の配置に加えて公園の整備も盛り込まれました。

復興計画はその後の財政難により大幅に縮小されますが、政府の事業として山下、野毛山、神奈川、日の出川の4公園が復興公園として計画され、日の出川以外の3公園が整備されました（注：日の出川公園は現在開園している同名公園とは別）。また、市が行う事業として横浜市児童遊園地や元町公園も整備されました。震災復興は計画的なまちづくりのきっかけとなり、多くの公園が誕生することになりました。

Column 02

明治から大正の横浜の民間力
プライベートガーデンの時代

「山手公園、横浜公園の開設以降、関東大震災までに開設された公園は？」※

こう聞かれて即座に答えられる方は相当な横浜の公園通です。明治中期から大正中期にかけては、横浜が居留地から都市に脱皮していく時期にあたりますが、急激な都市の発展に伴う諸問題に直面していた時期であり、また、制度整備が遅れる中で本格的な都市計画に着手したところで関東大震災が発生したため、結果的には公園の歴史の中では冬の時代ともいえる時期となってしまいました。

とはいえ、生活の場に緑とオープンスペースを求めるのは現代と同じだったようで、この時期の横浜で公園の機能の一端を担っていた存在が、貿易商などが私財を投じて整備、公開したプライベートガーデンなのです。

横浜随一の経済人、原三渓が本牧に建てた私邸の一部を明治39（1906）年に公開した三渓園がその代表格ですが、岡野家による常盤園（現 常盤公園）、大澤家による横濱ガーデン（神奈川区）、鶴見に開設され東洋一とうたわれた花月園遊園地。この他、井伊家の整備した庭園を市に寄附した掃部山公園もプライベートガーデンに分類できます。これらの多くは、のちに公園やオープンスペースとして活用されており、現在、花月園遊園地跡地に整備中の（仮称）花月園公園もその歴史の一端に位置しているといえます。このように都市横浜が形成される中で、民間の力によって創出された緑が、現在も形を変えながら後世に引き継がれ、横浜の緑を特徴づけています。

※正解は「現存では掃部山公園。廃止されたものでは翁町公園（児童公園P14）」

三渓園

関東大震災と公園・みどり

相模湾を震源とする関東大震災は震源に近い横浜でより大きな被害を出しました。特に建物が密集する市街地では火災が発生し、多くの犠牲者を出しました。当時開園していた横浜公園、掃部山公園には多くの人が逃げ込み火災から逃れることができました。公園周囲の樹木が火災旋風を防いだことなどによるといわれています。

このため復興計画では「公園は実に都市の金城鉄壁」として「小学校傍には附属の小公園を設ける」など公園の増設が盛り込まれました。計画は財政難により縮小を余儀なくされましたが、公園整備とあわせ街路事業、区画整理事業による街庭、広場、植樹帯の設置など、都市に緑地を設ける動きは確実に広まっていきました。

絵葉書 山下町の惨害（大正12（1923）年）（1）

山下公園

震災の瓦礫を埋め立てた上に造られている、日本初の臨海公園です。山下町地先は水深が浅く、瓦礫が投げ捨てられできた幅30間（約50m）の埋立地を活用し、さらに護岸を築造、山手隧道の掘削土砂などを敷き仕上げられました。

公園には30種13,000本以上の樹木や、噴水池、ボートベイシン（船溜まり）などが配置され、昭和5（1930）年に開園。昭和10（1935）年の復興記念横浜大博覧会の会場となり、公園前の海でクジラを泳がせたというエピソードも残っています。その後、ボートベイシンが沈床花壇になるなど幾度かの再整備がなされました。かつてシアトル航路へ就航した貨客船「氷川丸」も公園前に係留されており、名所となっています。

山下公園の造営（大正12（1923）年～昭和11（1936）年頃）（2）

野毛山公園

もともと野毛山は老松や巨木が多く「野毛の御林」とよばれる景勝地でした。そのため、横浜生糸貿易会の双璧と呼ばれた亀善の原善三郎と野沢屋の茂木惣兵衛など豪商が別荘を構える高級住宅地でした。また、震災復興計画では、市庁舎を関内からこの地に移転する案も検討されていました。

内務省は野毛山公園を中央公園として計画し、原、茂木両家及び隣接する浄水場用地、市長公舎跡地を取得して整備を始めます。大正14（1925）年に都市計画決定（本市最初の都市計画公園）、翌年に野毛山公園として第一期開園しました。園内は日本庭園風で東京も含め最も早く開園した記念すべき震災復興公園でした。昭和5（1930）年に第二期として洋風園地が開園し完成しました。

絵葉書 野毛山公園（大正12（1923）年～昭和15（1940）年頃）（2）

神奈川公園

野毛山公園が市の都市公園系統の中核になる「中央公園」として計画されたのに対し、方面別の市街地における中核公園となる「市街公園」（現在の近隣公園のモデル）として計画されたのが神奈川公園です。

近隣の高島山からの土で公有水面を埋め立て、さらに買収した私有地を加えて昭和2（1927）年に着工しました。

公園の中央に直径32尺（約9.7m）の噴水池や約750坪（約2,480㎡）の子供の遊び場のほか、神奈川会館という食堂、集会所を備えた鉄筋コンクリート3階建ての公会堂が建設されるなど本格的な施設を備え昭和5（1930）年に開園しました。

その後、進駐軍による接収や老朽化による会館の取り壊しを経て現在に至ります。

神奈川公園。左奥の建物は神奈川会館（大正12（1923）年～昭和11（1936）年頃）（2）

横浜市児童遊園地

元々は学制公布50周年を記念し市が計画した公園で、自然に親しみ健やかな体づくりができる児童のための公園として計画されました。

震災後は市独自の復興事業に位置付けられ早期に整備を行うことになりました。事業費は市内の児童生徒の寄附（1人10銭）や有志の寄附金で大半を賄い、土地所有者からの用地の一部無償提供もあり、昭和4（1929）年に竣工しました。開園後は定番の遠足場所として親しまれました。

戦後は接収され、英連邦戦死者墓地となります。現在の横浜市児童遊園地は、昭和32（1957）年に隣接地を取得し整備された二代目にあたります。

児童遊園地（年不詳）（2）

元町公園

明治初期、外国人居留地の山手77番では、フランス人ジェラールが湧水を利用した船舶向けの給水事業や西洋瓦の製造をしており、これらの施設は「ジェラールの水屋敷」と呼ばれていました。

震災を機に屋敷の跡地が市有地となった後は、水源を活用したプールの整備が計画されました。復興公園費や昭和御大典を祝し横浜市連合青年団が募った寄附金などを財源に整備し、プールや弓道場を備えた公園として、昭和5（1930）年に開園しました。この公園のプールは日本初の公認プールで当時「横浜プール」と称されました。夜間照明を備えるなど「東洋一」をうたわれていました。当時は湧水を利用したため水温は非常に冷たかったようです。

横浜プール（昭和10（1935）年）（2）

画像所蔵（1）横浜市中央図書館（2）横浜市市史資料室